ゆうことみゆきの
なるほど
アイヌ文化エッセイ

ソンコ de ソンコ

Vol.154

アイヌ文化のことをもっともっと話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で
執筆するソンコ(=お便り)形式のエッセイです。

今月のテーマ

漆器

村木美幸(アイヌ民族文化財団副理事長)

アジアに広く分布する「ウルシ」から採れる樹液を加工した「漆」を塗ったもの全般を漆器と呼びます。英語で「japan」や「japanese lacquer」と呼ばれる日本を代表する伝統工芸品として海外からも高く評価されてきました。塗りの美しさや技法に目がいきがちですが、耐久性や耐水性にも優れ、防腐、防虫効果のある実用品として使われてきた他、近年ではウイルスや菌の抑制効果が高いことが証明されるなど、機能性と装飾性を兼ねそなえた優品といえます。

津軽塗や会津塗、鎌倉彫、輪島塗、若狭塗、京漆器、琉球漆器などなど本州以南が漆器の主な産地ですが、最古の漆製品はなんと函館市の垣ノ島遺跡、約九千年前の土坑墓から出土しました。漆が塗り込まれた赤い糸で編まれた髪飾りや腕輪などの服飾品。北海道で、最古の漆器ってすごいですよね。

狩猟や漁撈などで得た毛皮、干魚などの産物を使ったウイマム(交易)や和人との挨拶儀礼であったオムシャなどによって入手してきた漆器。アイヌ語でウルシをウッシ、漆塗りの鉢をパッチ、行器をシントコ、湯桶をエチウシ、酒椀をトゥキ、天目台をタカイサラ、膳をオッチケ、唐櫃をカラウトと呼ぶなど日本語名がそのまま使われることも多いのですが、その利用においてはアイヌ独自の使い方をするものも多くあります。平安、室町の頃に水鏡や洗面器として使われた角盥や貝合わせの道具を入れた行器をアイヌは儀式で酒を入れる酒器として使います。アイヌの漆器は、酒造りや儀式などで使う祭具であり、晴れ着や首飾りなどの服飾品を収納する物入れ、食器などの日常使いの器であり、宝物、財産でもありました。また、主の徳を表すバロメーターともなるもので、チセ(家)のイヨイキリ(宝物置場)に二段三段と積み上げられるたくさんの漆器は、カムイ(神々)から信頼され、恵みを与えられ見守られる存在であることを示すとされます。

イラスト/山丸ケニ

ひとつひとつが魂を持つものとして各家で大切に扱われてきたアイヌの漆器ですが、同化政策などによる生業や生活の変化から使われなくなり手放すことも多く、近年では博物館などでしか見ることのできないものも。我が家には祖父が残した朱塗りのトゥキ(椀と天目台)を今も先祖供養の際に使っています。大切な祭具としてこれからも使い続けていきたいと思います。 Ⓙ

次回のテーマは「武四郎まつり」
本田優子(札幌大学教授)が担当します。

ウポポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間

JR白老駅から徒歩約10分

ウポポイPRキャラクター
「トゥレッポん」

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団副理事長。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■山丸ケニ(やまるけに):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団職員。ウポポイでアイヌ語体験プログラムを担当する。

イランカラプテ
「こんにちは」からはじめよう。